

Q1 1950年代、大修館の資金や収益構造とはどうなっていて、この間の事業を、どうやって経営的に維持したのでしょうか？また写研は13巻の完結までに、おおよそどのくらいの額で仕事を請け負ったのでしょうか？

A・当時の大修館の収益構造について、今となっては具体的に知ることはできませんので、大修館の社史『大修館書店100年』から戦後の事業再興の様子がわかる部分を引用します。

「昭和20年8月、疎開先の山梨で終戦を迎えた鈴木一平（注：創業者）は、翌9月に唯一焼け残った鉄筋2階建ての土蔵を社屋として、川上市郎（昭和11年入社、のち副社長）と二人で事業の再興をはかった。翌年の昭和21年1月には戦後最初の出版物となる堀英四郎他著『抑揚記号つき 正しい英語会話』を写真複写によるオフセット印刷で復刊、この1冊が、当社の戦後復興の大きな足掛かりとなった。続いて、土蔵に保管されていて戦災を免れた凸版によって『スタンダード英和辞典』と『スタンダード和英辞典』とを復刊、これも終戦直後の需要の波に乗って版を重ね、事業は急速に再建へと向かっていった。」

【補足】『抑揚記号つき 正しい英語会話』は、当初、二万部を刷ったと聞いております。他に、焼失を免れた学習参考書の紙型が数点あったようで、これも版を重ねました。因みに、昭和23年に100万円だった資本金は、翌年には150万円に増資されています。しかし、昭和28～29年頃には教科書の採択が思うように伸びなかったこともあって経営の危機を迎え、大漢和辞典の初版発行を前にして宣伝費が確保できず、金融機関からの融資を受けるのも大変だったというのを川上から聞いたことがあります。

・写研にどのくらいの額を支払ったのかについては、当時の関係者のほとんどは鬼籍に入っており、また、社内的にもオープンにされておりませんので、お答えできかねます。ご容赦ください。

Q2 大漢和の、三段組みの本間版下は、現存しているのでしょうか？棒組み印字の切り貼りで制作されたのでしょうか？また、禁則処理などの組版ルールは、どなたが主導されたのでしょうか（両端揃え、約物ぶら下がりなし？）

A・印字紙については全巻分現存しております。手動の時代ですので、切り貼りされたものです。1984年から刊行された修訂版のときにはかなり修正が入りましたので、なかには切り貼りの状態がかなり著しいものもあり、その場合には新たに紙焼きした状態で保存しているページもあります。

1989年に『語彙索引』が発行されたときに、その内容見本に「この語彙索引は、初版（1955～1960）・縮写版（1966～1968）・修訂版（1984～1986）」

のいずれの版にも、ご利用いただけます。」と謳ってありますが、それは修訂版作成のときに熟語項目のページ移動を避けるべく、切り貼りによって修正内容を同一ページ内に収めた結果です。

- ・禁則処理などの組版ルールは、戦前に「巻一」が出ておりましたので、その組体裁をそのまま写植の組版ルールに則って、(大修館の写真植字部にはまだその能力はなかったと思いますので) 写研の印字部主導で行われたものと考えられます。

Q3 大修館が写研に話を持っていった経緯は、どういうものだったのでしょうか？石井茂吉の伝記に「1952年に、大修館の川上市郎専務が、共同印刷顧問の古坂正勝に伴われ、石井茂吉を訪ねたのが最初」(大意、p. 215)とあります。そこに至る経緯は、お分かりになりますでしょうか？また、組版実務段階で、大修館社内の写真植字部と、写研の印字部との間で、何か分担の棲み分けはあったのでしょうか？

- ・大修館が写研に話を持っていった経緯については、ご質問にあった『石井茂吉と写真植字機』に載っている内容以上のものはないのですが、そこに出てくる大修館の川上市郎は、昭和11年に入社して以来、大漢和の企画者で社長だった鈴木一平に代わって実質的な大漢和の責任者として戦後の修訂版発行まで一環して関わってきた人間ですが、彼は戦後まもなくに方々の印刷会社を訪ね歩いて戦前と同様の活字組版による事業再興の道を探っていたようです。しかし、当時、横山印刷株式会社社長だった横山豊氏に、「昭和二十五年頃と思いますが、……相談を受けましたものの、時間を短縮し進行をはかる特別な策も急には見当たらず、本格的ではないが、昨今オフセット印刷にボツボツ写真植字による方式が採り入れられつつある情勢をお話し申し上げました。」という文章がありますので、恐らくその辺りから活字による事業再開を断念し、写真植字に関心をもちはじめ、当時、共同印刷の技術顧問だった古坂正勝の知遇を得て石井茂吉を訪ねたのではないかと思います。
- ・組版段階での写研と大修館印字部との棲み分けですが、私が聞いている範囲では、印字分量を二分し、写研は2台、大修館では5台の写真植機で印字を開始、印字作業に従事する社員については写研に派遣して技術を習得させ、写研では、技術面でのことはもとより、品質管理のことなどもすべてオープンにして大修館に提供したとのことです。また、熟練の写研の印字部でさえ一日で1ページ半印字するのがやっとだったといいますから、大修館では恐らくその半分以下ではなかったかと想像できます。

以上、大変遅くなりましたが、お答えとさせていただきます。(文責) 池澤正晃